

## 西行と芭蕉

竹島智子

## 一 両者の共通性と相違性

本小論においては、芭蕉に焦点をあてつつ、彼が血脈として見いだした西行と対照比較することによって、撰取法におよび、芭蕉文学の本質にせまりたい。

周知のように、芭蕉が西行について語った文章は多い。『虚栗』跋文をはじめとして『野晒紀行』、『洪笠ノ銘』、『笈の小文』、『奥の細道』、『嵯峨日記』、『許六離別詞』元禄三年千川宛書簡・元禄五年曲水宛書簡など、芭蕉が世に認められるようになってから、くり返し述べている。それほど、西行は芭蕉の心深く生き続けた先人であり、蕉風樹立に不可欠の存在であったといえる。

芭蕉は、一応安定した時代にあつて西行的生き方をしたのであるが、両者には時代差をこえた共通性が見い出される。ともに、思索的で内向的性格の持ち主であることは、異論のない所であろう。

うとくなる人を何とて恨むらむ知られず知らぬ折りもありしに  
心から心にもを思はせて身を苦しむるわが身なりけり

いざ心花を尋ぬといひなして吉野の奥へ深く入りなむ  
などの西行の歌、

芭蕉野分して盃に雨を聞く夜かな  
やがて死ぬけしきも見えず蟬の声  
此の秋は何で年よる雲に鳥

などの芭蕉の句や「物をもいはず、ひとり酒飲みて心に問ひ心に語る。」（閑居の箴）などには、心の奥深く真の自由人となろうとする、しかも、軽妙な味わいがある。

うなるごがすきみに鳴らす麦笛の聲に驚く夏の昼臥し  
昔かないりこかけとかせしことよあこめの袖に玉だすきして  
篠ためて雀弓張るをのわらはひたひ烏帽子のほしげなるかな  
などの西行の歌、また、

原中や物にもつかず鳴く雲雀  
五月雨や鳩の浮巢を見に行かむ  
三井寺の門たたかばやけふの月

などの芭蕉の句を見れば、そのことは首肯されるであろう。つま

り、西行と芭蕉とは、ともに、内向性と自在性とを兼備し、自らの精神生活を大切にした詩人であったといえる。

もちろん、両者にも相違はある。その相違は、時代差・健康状態・味わい・象徴性等にしばって考えられるが、本小論では、特に味わいについてその一端を考察したい。両者の味わいの相違は、恋の部に最もよく示されていると思う。

つれもなき人に見せばやさくらばなかせにしたがふ心よわさを  
ひとかたにみだるともなき我恋や風さだまらぬのべのかるかや  
ゆみはりの月にはづれて見しかげのやさしかりしいつか忘れ  
む

かずならぬ心のとがになしはてて知らせでこそは身をもうらみ  
め  
いつとなくおもひにもゆる我が身かなあさまのけぶりしめるよ  
もなく

西行の「かずならぬ身」を反映したのであろうか。いずれも内省的で、自らに言いよかせているようなやさしい、また一面恨みの秘められた歌である。その恨みも、西行自身に帰っていて、清艶といふべき味わいがある。

つぎに、『俳諧七部集』から芭蕉の恋の付句を引用する。

雪の狂呉の国の笠めづらしき  
襟に高雄が片袖をとく

花骨  
はせを

足駄はかせぬ雨のあけぼの

越人  
〔冬の日〕

きぬくやあまりかばそくあてやかに

芭蕉

〔曠野〕

ほそき筋より恋つのもりつゝ

曲水

物おもふ身にも喉へとせつかれて

翁

〔ひやく〕

隣をかりて車引こむ

凡兆

うき人を枳殻垣よりくぐらせん

芭蕉

〔猿養〕

上をきの千葉刻むもうはの空

野坡

馬に出ぬ日は内で恋する

芭蕉

〔炭俵〕

など、西行のような主情的なやさしき、清艶の味わいに乏しく、前の二句は官能的で、いずれの句にも濃艶の味わいがあり、客観的で知的である。芭蕉に比し、西行に、主観的な抒情が強いことは横沢三郎氏も述べられ（『俳諧の研究——芭蕉を中心に』所収「俳句の性格」参照）、何人も認めるであろう。芭蕉の恋の句については、白石悌三氏が「生活の恋を切り捨てることよって女性性は文芸の世界に艶なる姿態を現した」（『国文学解釈と鑑賞』昭和三十九年七月号所収「芭蕉伝記」）とされるのであるが、体験にもまざる想像力が庶民の恋を如実に描き出したと考えられる。芭蕉が、大衆芸術としての連句に、恋の句を重視したことは、『三冊子』、『統五論』に見え、庶民の人情の機微にふれた詩人であったといえよう。音楽的・夢想的・内省的で、やさしい心情のうかがえる西行の歌に対

し、芭蕉の句は絵画的・現実的・官能的である。<sup>(註二)</sup> 両者には、時代差のみならず、斎藤清衛博士(『詩・歌調・俳味』所収「西行より芭蕉へ」参照)や北住敏夫博士(『和歌の世界』所収「和歌と俳句」参照)の言われる文学ジャンルの相違や、構成的にならざるを得ない連句の性格を考慮に入れなければならない。そして、西行の清艶・芭蕉の濃艶を味わいの根本的な相違であると考える時、芭蕉の句は、いかにも俳諧的であるといわなければならないであろう。

また、味わいを考察する時、その作家が、いかなる対象に「あはれ」と感じたかということも観点となる。特に、わが国の古典、とりわけその詩作品において一層重要な観点となるであろう。ここでは、「あはれ」とうたわずにいられたなかった詩作品をとりあげる。

心なき身にもあはれは知られけり 鴨たつ沢の秋の夕暮  
とよんだ西行は、心ふかく哀感のある中世的「あはれ」ととらえ、調べのおった主情性を見せた。西行の特性がよく出ているこの歌に対し、芭蕉も相当の関心をはらっていたことは、

師のいはく、大方の露には何のなりぬらんたもとにおくは涙なりけり、此うたは鴨立沢に勝ツ哥也。面白しと也。(『三冊子』)

と伝えられていることよってわかる。このことは、<sup>(註三)</sup> 俊成と同様に、芭蕉も、抒情に流れたような歌よりは知性のきらめきが見える歌を興味深く思ったとみなしてよいであろう。その他「あはれ」という表現を持った西行の歌を『山家集』から引用すると、

ゆく春をとどめかねつるゆふぐればあけほのよりもあはれなり

けり

ほととぎすただ一こゑのしのびねをきくあはれなるあかつきの

空

おもふにもすぎてあはれにきこゆるは狄の葉みだるあきのゆふ

風

よをのこすねざめに聞くぞあはれなる夢野のしかもかくやなく

らむ

などがあり、去りゆくものや荒涼としたものにそそぐ哀感をとらえ

た。

一方、芭蕉においては、

霜月や鶴のイタならびるて

冬の朝日のあはれなりけり

巡礼死ぬる道のかげろふ

何よりも蝶の現ぞあはれなる

荷兮

芭蕉

などの付句や、

昼顔に米搗涼むあはれ也

梅が香に昔の一字あはれ也

といった句に見られるように、「朝日」、「蝶」など一見はなやかな素材をとらえながら、その奥に深い悲しみ——あはれ——をとらえ

た。芭蕉の句には、現象の背後を見すえて静かに堪えた悲しみがあ

る。西行に比し、陰影の濃厚な作品を生んだことも、両者の味わい

の相違を語るであろう。そのことは、象徴性において、芭蕉のほうが秀れていることを示すであろうし、このことは、『奥の細道』の虚構性にもうかがえるところである。

味わいや象徴性の要因として、時代や健康状態が微妙に関係していると考えられる。現実基盤の不安定な動乱時代であって、いよいよ自らの世界を清く守ろうとした西行と、一応安定した基盤と民衆勢力の伸長が見られる時代であって、なお西行の生き方をしようとした芭蕉との差であった。芭蕉の句に、民衆とともにあろうとする趣が見え、はば広さの見えるのも、時代の影響に負うところが多いと考えられる。また、健康状態のすぐれなかった芭蕉は、四十歳以後、書簡に無常観をくり返し述べている。

草枕月をかさねて、露命恙もなく、(中略)旅といひ、無常といひ、かなしさいふかぎりなく、折節のたよりにまかせ、先一

翰投三机右二而已。(貞享二年四月五日付 其角宛)

無常迅速々々。(貞享三年十二月一日付 知足宛)

され共風俗そろく、改り候へゞ、猶露命しばらくの形見共思召レ可被レ下候。(貞享四年十一月二十四日付 知足宛)

其日のあはれ、其時のかなしき、生死事大無常迅速、君わする事なかれ。(元禄元年四月二十五日付 猿雖宛)

互露命つがなく候はば、再顔眉を開可レ申候。(元禄六年三月十二日付 岸本八郎兵衛宛)

こうした無常の思ひによって、「文台引きおろせば即ち反古也」(『三冊子』)とするきびしさを増し、重厚な人間を作りあげたとみ

られる。

西行の無常観が見える歌を『山家集』から引用すると、

いづくにかねぶりねぶりにて倒れふきむとおもふかなしきみちし  
ばのつゆ

おほなみにひかれいでたる心ちしてたすけぶねなき沖にゆるる  
る

死にてふきむこけのむしろを思ふよりかねてしらるるいはかけ  
の露

など、宗教的な彼岸思想に裏づけられた悲しい安らぎがある。そのことは、『台記』、『吾妻鏡』の伝える西行の強い健康状態に加えて、宗教性をおびた詩人西行を髣髴させる。以上述べたような相違を持ちながら、芭蕉は、西行を思慕してやまなかったことが、じつは重要なのである。<sup>(註五)</sup>

## 二 芭蕉の摂取法

芭蕉は、西行の歌をいかに摂取し、独自の作風を築いていったのであろうか。

(1) あきらかに影響を受けていると見られる句

(イ) 転用

佐夜の中山にて

命なりわづかの笠の下涼み(延宝四年作)

は、「年たけてまた越ゆべしと思ひきや命なりけりき夜の中山」(『山家集』)を夏季に転用した。

菜畑に花見顔なる雀かな（貞享二年作）

は「真菅生ふるあら田に水をまかすればうれしかほにも鳴蛙かな」

〔「桃の杖」の「水田の蛙」を「菜畑の雀」とし、春季に転用した。〕

原中や物にもつかず鳴雲雀（貞享四年作）

は、「雲雀たつあら野におふる姫ゆりの何につくともなき心かな」

〔「山家集」という定まらない心を、何にもとらわれない自由な心

に転用した。後年になるにつれて、内容的に独自性のみられる句の

転用へと進んでいることが認められる。〕

(四) 具体化

具体化は、いわば、俳諧の常套手段であるが、変遷があり、抽象的になってくる。

年暮ぬ笠きて草鞋はきながら（『野晒紀行』貞享元年作）

は、「常よりも心細くぞ思ほゆる旅の空にて年の暮れぬる」（『山家集』）という歌を、直叙的・具体的ににして自らを投影した。

雲折々人をやすむる月見哉（貞享二年作）

は、「なかく〜に時々雲のかかるこそ月をもてなすかざりなりけり」

〔「山家集」という歌を、現実の人間に即して「人をやすむる」と

具体化した。〕

鷹一つ見付てうれしいらご崎（『笈の小文』貞享四年作）

は、「巢鷹渡る伊良胡が崎を疑ひてなほ木に帰る山帰りかな」（『山家集』）をふまえて、杜国にあえた喜びを具体的に明言した。

ところで、(イ)(ロ)ともに貞享末年までで、なかには、「芋洗ふ女西

行ならば歌よまん」（『野晒紀行』）といった回想の域にとどまる句

もみられるが元禄年間にはいると、複雑かつ隠微な撰取法となる。

(五) 人事化

田一枚うへてたちさる柳かな（『奥の細道』元禄二年作）

は、「道のべに清水流るる柳蔭しばしとてこそ立ちとまりけれ」（『山家集』）をふまえて、田植えに焦点をあてて人事化し、動的に時

間の推移を示した。また、同年の作

蛤のふたみにわかれ行秋ぞ

は、「今ぞ知る二見の浦の蛤を貝合せとて覆ふなりけり」（『山家集』）という説明的な歌を、別離の心情を表わす挨拶句に人事化し

た。西行の歌より、スケールの大きい句となっている。

(六) 閑寂の徹底

うき我をさびしがらせよかんこどり（『嵯峨日記』元禄四年作）

は、「山ざとへたれをまたこはよぶことりひとりのみこそすまむとお

もふに」（『山家集』）によりつつ、呼格にして閑寂に徹しようとした。

(2) 影響を受けてはいるが、そのかげりのうすい句、つまり象徴

詩として高い価値を持つ句

(イ) 象徴

何の木の花とは知らず句ひ哉（『笈の小文』貞享四年作）

は、「何事のおはしますかは知らねどもかたじけなきに涙こぼるる」

〔『西行法師家集』〕という感傷的な歌を受けて、「句ひ」という言

葉で象徴的に示した。

ところで元禄六年初秋の閑閑後は、澄んだ美しさが見えてくる。

(ロ) 美化

范蠡が趙南のころをいへる山家集の題に習ふ

一露もこぼさぬ菊の水かな(元禄六年作)

は、「すてやらで命をこふる人はみな千々の黄金を持ってかへるなり」により、澄明美を出した。

しら菊の目にたてて見る塵もなし(元禄七年作)

は、「曇りなき鏡の上にある塵を目に立てて見る世と思はばや」(『山家集』)を美化し、園女の清純な様子をたたえた。

こうして、芭蕉は西行の影響を強くうけたのであり、晩年の句には、たんたんとしたなかに深い味わいがこめられている。西行の影響を受けた句も、究極には、深く澄んだ美しさを志向していて、詩がついに帰る地点をも示している。従って、芭蕉について「古人のイメージがきえた晩年は革新者としての孤独があった」(『国文学』第十三巻第四号所収「伝統に対する姿勢」)とされる白石悌三氏の説は、過言ではないかと考える。とりわけ、西行からの影響に関するかぎり、晩年に至ってもそのイメージが消えることはなかったといえよう。ただ、影響を受けた形跡が淡くなり、芭蕉独自の作風となっていたことは、注目にあたいる。元禄六年五月、門人の許六に「古人の求めたる所を求めよ」と教え、自らも励んできたことが、澄明美となって結晶したのである。前に述べた西行の清艶・芭蕉の濃艶という味わいの観点からすると、晩年には西行の精神へはいつていったと考えられる。芭蕉によって、中世の伝統的な美が、近世という時代の庶民の目をくぐってあらわれたのであった。初期には俳諧の常套手段によっていたが、後期には本来の象徴詩として

高めるべき手段をうち出したことが、以上で明らかである。

### 三 文学史上における芭蕉

日本文学史上における近世は、いつからはじまるとするのが妥当であろうか。それには、古来二説があつて、主要な説は、

(1)明治維新からとする説

五十嵐力・坂井衡平・次田潤・遠藤佐市郎・藤岡作太郎・

風巻景次郎の諸氏

(2)安土桃山時代からとする説

吉田精一・久松潜一・重友毅・市古貞次・守随憲治の諸氏

がある。(1)の説は、政治上における近世と一致し、戦前は有力であった。(2)の説は、久松潜一博士が力説され(『日本文学史通説』、『日本文学史下』など参照)、中世に比し明るくなっていることに注目された。漸次に移行していくもので、確とした時代区分は不可能であろうが、近年では、安土桃山時代から近世と見る説が有力である。

ところで、西行は中世詩人と言われつつ、芭蕉は、中世的色彩を多分に有しているところから、ただちに近世詩人とは称されなかった。芭蕉が、中世文学から強い影響を受けていることは、周知のとおりである。宮田戊子氏は、「中世的なものは芭蕉を以て跡を絶つに至ったと思われる。」(『短歌研究』昭和十一年十月号所収「芭蕉に於ける西行の影響」)とされた。とりわけ、西尾実博士は、「芭蕉こそ中世文学における創造主体としての完成者」(『中世的なものとその展開』所収「中世詩人としての芭蕉」)とされ、芭蕉を中世詩人と見られている。一方、近松秋江氏は、「芭蕉には西行の持つ

ていない民衆的な、平民的な、詩材が多い」(『早稲田文学』大正八年七月号所収「西行と芭蕉」とされた。また、能勢朝次博士は、「芭蕉は西行や俊成を理想としているが、又、自己の風雅がそれに劣るものではないとの見識を持っている。従って歌にながむる所と俳諧にらむ所の相違ももちろん自覚している。」(三省堂刊『芭蕉講座』第七卷所収「風雅道」とされ、広末保氏は、芭蕉を中世詩の完成者とする見方に反対され(『芭蕉と西鶴』所収「中世詩と芭蕉」参照)、「芭蕉は民衆の新鮮な悲しみの心にふれて、再び俳諧のうちに生きかえろうとしている。」(『元禄文学研究』所収「風流と俳諧性」とされた。さらに、安田章生博士は、芭蕉の現実主義的な詩作態度を、中世とは異なる近世的性格であるとされた(『藤原定家研究』所収「芭蕉と定家」参照)。

以上、二説に大別できるが、最も近世的色彩を帯びるのは江戸時代であることは、諸説の一致を見る。そこで、芭蕉が生きた時代の性格と、同時代の作家西鶴が芭蕉をいかに受け入れたかを考察したい。久松潜一博士が、「芭蕉が活動した時代は近世に於ける文芸復興の時代といわれる元禄時代であって、それは古代中世以来の伝統文化に復帰し、再吟味する事によって新しい文化を創造しようとした時期であり、その機運に応じて契沖や近松、西鶴等が芭蕉と並んで活躍したのである。」(『国文学通論』所収「時代研究」とされたことは異論がないであろう。そのために、板坂元氏の、江戸時代の文学は雅俗の融合した文学であるという説(『岩波講座日本文学史』第七卷所収「初期俳諧」参照)が成立するのである。そういう

時代の空気を吸って、西鶴同様芭蕉も談林俳諧から生まれ出た。もつとも、大谷篤蔵氏の言われるように「お互いに相手に対して関心をもちつつも、その作品の体質的基盤の相違から、相互にその真価を認めることができなかった。」(『国文学解釈と鑑賞』昭和四十四年十月特集増大号所収「西鶴と芭蕉」と考えられるが、西鶴は、芭蕉を「只俳諧に思ひ入りて心ざしふかし。」(『西鶴名残の友』)と言って、異なる方向へ行つた芭蕉の存在を軽視していない。そのことは、頼原退蔵博士の「芭蕉と西鶴との個人的な立場は異なつたとはいへ、近世という大きな時代の動きから見れば、彼等が文芸の上に成し遂げた所は、結局同じ意味を持つべきものであった。」(『俳諧文学』所収「蕉風の俳諧」という見解をはじめとして、大谷篤蔵氏の「西鶴も芭蕉もひとしく人間に対する目をもち、人間を描いたことによつて共通の近世的性格をもち得た」(『国語国文』第二九七号所収「蕉風俳諧における人間」・『国文学解釈と鑑賞』所収「西鶴と芭蕉」参照)という見解に示されている。

芭蕉に、中世的色彩の濃厚なことは否定できない。近世という時代に生きつつ、中世詩人西行を慕い、西行の芭蕉に及ぼした影響は大きい。ところで、前に述べたように、西行との本質的相違は、初期においても俳諧的手法によつていて、西行の歌からの摂取も、後年には独自の象徴詩へひきあげている。さらに、連句を見、近世詩人と見る諸説を参照して、近世という時代の性格および西鶴の受容により、近世詩人と見なしてよいであろう。

芭蕉の詩業は、俳諧に、詩作品としての昇華をはかることにあつ

た。その道は、先人とりわけ西行を心ふかく受け入れつつ、やがて脱出し創造しようとした過程である。

(注一) すでに、尾山篤二郎氏は、西行と芭蕉との共通点を「ごまかしのない生活に終始した真人であった」とされ、相違点については、両者の「人格と時代」とに見い出されている〔博文館刊『新文学』大正十年十一月号所収「西行と芭蕉」参照〕が、一歩進めてみた。

(注二) そのことは、支考が言ったと伝えられる「吾翁は耳をもて俳諧を聞くべからず、目をもて俳諧を見るべしといへる。」〔俳諧十論〕にも示されている。

(注三) 御裳溜河歌合において、俊成は、「鳴立つ沢のといへる、心幽玄に姿及びがたし。但、左歌露には何のといへる詞、あさきに似て心殊に深し。勝と申すべし。」と述べた。

(注四) 芭蕉の健康状態がすぐれなかったことは、書簡に、持病下血などたびく、秋旅四国・西国もけしからずと先おもひとどめ候。(元禄三年四月十日付如行宛) 去年遠路につかれ候間、下血など度々はしり、迷惑致し候て、遠境羈旅不レ叶候。(元禄三年七月十七日付牧童宛)

湖へもえ出<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>申候。木曾塚にてふせりながら人々に対面いたし候。(元禄三年八月十八日付凡兆宛) などと、しるされている。

(注五) 『三冊子』によると、元禄三年には軽みを志向していたことがわかるのであるが、

愚眼故能人見付ざる悲しきに、二たび西上人をおもひかへしたる迄ニ御座候。(元禄三年四月十日付 千川宛書簡)

と言っている。元禄六年夏の芭蕉の句に、「晋の淵明をうらやむ」という詞書が見えていて、晩年に至るほど、たんたんとして清らかな無私の境地を志向していたと考えられる。そのことは、西行を慕い続けたことと無関係ではないであろう。

(注六) この歌は、初句「山ざとに」(流布本) 第二句「たれをこはまた」(温古堂本) 結句「すめりとおもふに」(一本) という異同があるが、文明社刊『西行全集』に従った。

(注七) 杉浦正一郎博士は、「晩年の芭蕉の句には、芭蕉の人間全体の重みがずっしりとかかっている。」〔芭蕉研究〕所収「芭蕉の発句」とされ、何人も認めるであろう。そうした重みが、表現上では、むしろさりとしていることは、〔注五〕とも参照して、西行の精神に深くはいつていったと考えられる。それゆえにこそ、撮取法に見られるように、真の俳諧を樹立しようとする芭蕉の内面的葛藤は、西行を中心に展開したともいえるのである。

本稿は、卒業論文の一部を抜粋し、補正したものである。